観能のタベ

（石川県立能楽堂）

令和二年二月二十九日（土曜日）午後二時三十分開演

演目解説　村戸弥生（金沢美術工芸大学非常勤講師）

狂言　雁大名（がんだいみょう）

めでたく訴訟がない、近日国へ帰る大名が、在京中世話になった人々に振る舞い事をしようと、太郎冠者に肴を買いにやらせます。冠者は肴屋町の店先に見事な初雁を見つけ、値引きの交渉も首尾よく済ませましたが、肝心の代金を持たないのに気づきます。長の在京で大名家の経済は逼迫し、振る舞い事をする余裕など実は全くなかったのです。困った二人は肴屋から初雁を盗む算段をし、実行しますが、その際のお国言葉が聞きどころです。大名主従の悪巧みが成功してしまうところが、かえって窮迫する大名の実態を伝えると見られます。

能　葵上（あおいのうえ）

光源氏の正妻葵上（出し小袖）は病床を襲う物の怪に悩まされています。その正体を知るために、葵上の実家、左大臣邸には口寄せの上手、照日の神子（ツレ）が招請されます。神子が梓弓に掛けて呼び寄せた物の怪とは、破れ車に乗り青女房を伴った上臈女性（前シテ）でありました。朱雀院に仕える臣下（ワキツレ）は神子の報告を受け、大方を推量し、物の怪に名前を尋ねます。物の怪は六条御息所の怨霊（前シテ）を名乗ります。光源氏の愛人で前の東宮妃として知られた名前です。人の世の無常を観じ、自らの心奥を直視する知性の持ち主です。しかし葵上への恨みを持て余しています。そう述べるにつれて自制を失った怨霊は、遂には後妻打ちの乱行に及びます。怨霊は葵上を破れ車に乗せて連れ去る勢いです（物着）。事態は切迫し、左大臣邸には横川の小聖（ワキ）が呼ばれて、般若の鬼と化した怨霊（後シテ）と対決します。数珠を揉む行者と打ち杖を手にした鬼女との息をのむ闘争の果てに、読経の声に感応した御息所は退散を宣言します。さすがの悪鬼も心を和らげ、成仏得脱の身となり行く奇跡が起こります。

（西村　聡）

シ　テ（六条御息所）　鬘をつけ、鬘帯をしめ、泥眼の面をかける。摺箔を着附に着、縫箔を腰巻にして、腰帯をしめ、上に唐織を壺折に着る（持物、扇）物着にて面を般若に替え、唐織を脱ぐ。（持物、打杖）

（午後四時二十分頃終了予定）